

国語科 問題等の訂正について

大問

二

 本文 89 行目 掴んだ→搦んだ に訂正

(解答はすべて解答用紙に記入しなさい)

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

先日、息子の幼稚園のタイケン入園に出かけてきた。動物のぬいぐるみを手に童謡を歌う先生たちの方を、じつと大人しく座って見つめる子どもたちのなかで、息子は、部屋中を駆け回り、しまいには先生の前へゴミ箱を持って、嬉々としてダイブしていた。彼は明らかに、期待されているはずの規範から逸脱した行動をしていた。¹僕はその場で、彼を叱るべきか迷った。

守ることもできれば、破ることもできる「規範」に従って人間は社会をイトナむ。同じ規範に、尊ぶべき「英知 (wisdom)」を見るか、乗り越えていくべき「偏見 (bias)」を見るかで、現実はかなり違って見える。子育てをしていると、英知と偏見の線引きの難しさに、何度も直面することになる。

環境から閉ざされたコンピュータにしかるべき規則さえ与えることができれば、機械は知的に振る舞うことができると、信じられていた時代もあった。A、与えられた規則にフクジユするだけの機械は、その規則によってあらかじめ規定された枠 (frame) の外に出ることができず、固定された問題を解く以上の知性をハツキしないことが次第に明らかになる。そこで、コンピュータに身体を持たせて、現実の環境に^⑤うめ込むことで、状況 (situation) に寄り添った、柔軟な振る舞いのできる機械を作ろうとする動きが出てくる。整った理想空間のなかで、理性的に推論するだけでなく、不都合と予測外に満ちた環境で、何とかやりくりしていく力もまた立派な知性なのだという認識がここに芽生える。

現代の教室はしかし依然として、不都合と予測外が排除されたノイズの少ない空間である。そこでは、学ぶものの働きかけによって変わることはない不動の「知識」が供給される (ということになっている)。人間の思考と認知が、いかに環境に漏れ出しているかをこの数十年の認知科学が明らかにしてきたとすれば、教室に閉じ込められた子どもたちは、環境に漏れ出していくことがないよう、未だ慎重に管理されている。この特殊な空間のなかで、おとなしく授業に参加できない子どもたちもいる。それは果たして、「尊ぶべき英知」への敬意を欠いた無作法なのか、それとも「根拠なき偏見」を乗り越えようとする挑戦なのか。見極めることは簡単ではない。

² 現代は自明視されていた様々な規範が、音を立てて壊れていく時代だ。規範には知恵と偏見の両面があり、実際には、線引きが

画然とできないことが多い。規範が比較的安定しているうちは、それを知恵として尊び、共同で支えることで、社会の予測可能性を保つことができる。ところが、規範が高速で変替していくいま、大人しく規範を受容できる従順さよりも、規範を知恵としてみる視点と、偏見とみなす観点を、自在に切り替えることのできる柔軟さの方が求められる。同じルールを保守すべきと頑なに拘るのでもなく、悪しき思い込みだと馬鹿にするのでもなく、見方を隨機応変に切り替えながら、複数の現実を並行して生きていく力が必要とされているのではないだろうか。一つだけの物語を信じるのができた時代より、不確かで、知的負荷の大きな時代を僕たちは生きている。

不確かな時代は、いつも恐怖を煽る言説が蔓延る。しかし、「パニックるのではなく戸惑え」と、『サビエンス全史』や『ホモ・デウス』の著者ユヴァル・ノア・ハラリ (Yuval Noah Harari, 1976-) は近著『二十一世紀のための二十一のレッスン』(未邦訳。原題は『21 lessons for the 21st century』) のなかで忠告している。B、不確かな未来を恐れてパニックに陥ることは、不確かな未来は「悪い」未来であると、決めつける無意味さの裏返しだからだ。「戸惑い (bewilderment)」は「パニック」よりも謙虚なのである。「恐ろしい未来がくるー」と思考停止で叫ぶよりも、「何が起きてるのかさっぱりだ」と困惑しながら、考え続けることの方が前向きだ。

僕もいま、困惑している。これからどんな時代が訪れるのか、たった十年後の世界がどんな場所になっているか、僕には想像もつかないのである。

こんな時代に、子どもにどういふ教育を受けさせるべきかと、同世代の子を持つ親に聞かれることがある。僕が思うに、子どもにも「教育を受けさせる」という発想を捨てることこそ、まず一番にやるべきことではないだろうか。

「子どもに教育を受けさせる」というとき、どこかで自分は「学び終わって」いる側で、子がこれから「学ぶ」時代に入ってくるのだという考えが頭にあるのではないか。しかし、制度や規範が流動化している現代において、学びが終わるということはない。学ぶことは安定した大地の上にピラミッドを建設することより、どちらかといえば、荒波の上で、サーフボードを操縦し続けることに似ている。絶えず重心と姿勢を調整しながら、動き続け、考え続けたいといけないのである。足場を固定し、人生の序盤で蓄えた知識でやりくりしていくことができるほど、世界はもう単純ではない。

私は研究者 (investigator) である。私は探りを入れる。私は特定の観点を持たない。(……) 探求者 (explorer) はまったく首尾一貫していない。いつどの瞬間に自分が驚くべき発見をするのか、彼はC知らない。

これはマーシャル・マクルーハン (Marshall McLuhan, 1911-1980) の言葉を編んだアンソロジー『マクルーハン——ホット&クール』(原題は『McLuhan: Hot & Cool』) に、本人が寄せた文の一節である。特定の観点から世界を見晴らし、首尾一貫した物語を構築するのではなく、全貌を把握できない未知の世界に自らを投げ込み、探りを入れる。彼は自分が、その意味での「研究者 (investigator)」であると宣言するのだ。

彼の「make probes」という言葉を「探りを入れる」と訳したが、probeは「探針」や「探り棒」のことで、「make probes」というのは、外から眺める代わりに、知りたい世界の中に入り込み、全身でそれに触れることで、情報を得ていく方法を意味する。知ることとは動きかけることであり、学ぶことは、学ぶべき対象とともに自己を變形させていくことだというイメージをありありと喚起させる表現である。

人はすべて、意味の確定していない未知なる世界に投げ込まれた存在である。大人も、子どもも、「いつどの瞬間に自分が驚くべき発見をするのか」知らない「研究者」として生きることができる。僕ができることは、子どもにどのような教育を受けさせるべきか悩むことではない。子どもに自分の「知識」を授けることでもない。ただ、彼らの手を引き、ともに同じ「探求者」として、未知に飛び込み、戸惑いながら、この圧倒的に不思議な世界に「探りを入れ」続けていくことだけである。

(出典 森田真生『数学の贈り物』ミシマ社による)

問一 線①、⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A、Cに入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア なせなら イ もちろん ウ 決して エ だから オ ところが

問三 ―線1「僕はそこで、彼を叱るべきか迷った」のはなぜだと考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 息子の嬉しそうな様子を見て、規範を守ることが期待して子育てをしていた自分に、自信が持てなくなったから。
- イ 息子の規範から逸脱した行動は、偏見を乗り越える行動かもしれず、その可能性を邪魔してはいけないと思ったから。
- ウ 息子の嬉しそうな様子を見て、一方的に叱りつけるのは良くないと考え、怒りは我慢すべきだと考え直したから。
- エ 息子の規範から逸脱した行動は、不確かで知的負荷の大きな現代において、たくましさを感じさせる部分があったから。
- オ 息子の行動は規範からはずれてはいたが、人類の英知をかいまみせる部分もあり、怒るべき行動とは思えなかったから。

問四 ―線2「現代は目明視されていた様々な規範が、音を立てて壊れていく時代だ」とありますが、このような時代に必要なのはどのような力ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 規範には知恵と偏見の両面があることを自覚しながらも、「根拠なき偏見」を乗り越え環境を変えようと挑戦する力。
- イ 規範が高速で変容していく時代に、規範を知恵として尊重しつつ共同で支えることができるように従順に受容する力。
- ウ 規範を知恵としてみる視点と偏見とみなす観点を、臨機応変に切り替えながら複数の現実を並行して生きていく力。
- エ 不確かで知的負荷の大きな時代に、規範を悪い思い込みだと馬鹿にすることなく一つだけの物語として捉える力。
- オ 規範が安定していれば大人しく受け入れるが、変容すれば時代に合わせて尊ぶべき英知であっても変更しようとする力。

問五 ―線3「エヴァル・ノア・ハラリ」の著書から、筆者はどのようなことが大切だと読み取りましたか。本文中から三十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問六 ―線4『子どもに教育を受けさせる』(まず一番にやるべきこと)とありますが、なぜそう言えるのですか。最も
適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 足場を固定して知識を固めていく生き方はあまりに単純であり、どんな時代が訪れるのかを常に予想して生き
ていく必要があるから。
- イ 十年後の世界も想像できない現代においては教育を受けさせても無駄なのに、子どもは勉強するべきだとい
う発想にとらわれているから。
- ウ 安定した大地の上にピラミッドを建設することより、どちらかといえば荒波の上でサーフボードを操縦し続け
ることが重要だから。
- エ 制度や規範が流動化している現代では学び続ける姿勢が重要なのに、人生の序盤で知識を蓄えさせようとする
考えにとらわれているから。
- オ 不確かな未来を恐れてパニックになることは未来を悪いものだと決めつけることであり、本当は謙虚に考え続
ける必要があるから。

問七 筆者が考える子どもたちにできることを、五十字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

俺が殴りかかろうとすると、須野木はまだぎゅっと目を閉じた。

「だから、目、つぶんってー！」

体も強張^あらせて、立ちすくんだまま、自分からは動こうとしない。

「俺の手、こうやって掴^{つか}めよ。それで、こっちに押し倒す感じで」

わざわざ須野木の手を握って、自分の腕を掴ませる。

なんで、ここまでせなあかんねん。

自分からもっと積極的に動いて、身につけようとしろよな。俺なんか、父親相手にどんだけ練習したと思うねん。

「いいから、ほんまに」

須野木は俺の手を振り払うようにして、そんなことを言った。

「なんや、それ、ちゃんとせえよー！」

やる気のない須野木に、こっちはイライラした。

負けたら悔しいやろ？ やられたら、やり返したいやろ？ ちゃうんか？

俺が怒鳴ると、須野木は申し訳なさそうな顔をして、つぶやいた。

「暴力とか、嫌いやし」

そんなん、俺かつて、暴力は嫌いや。

でも、だからこそ、護身術は覚えといたほうがええんちゃうのか。

「あんな、これは自分の身を守るために、やってることや。暴力と護身術はべつもんやろ」

そんなふうと言いつつ、自分でもよくわからなくなってきた。

須野木が本気で嫌がっているなら、俺のやっていることは……。

「ええから、ちよっとだけでも練習しとけって。倒すつていうても、実際にやらんでもいいねん。ただ、やり方を知っておくつて

いうのが、重要やから。いざとなつたら倒せるつていう自信が、オーラみたいになつて、いじめられへんようになんねんつて」

いじめ、つていう言葉は使いたくなかつた。けど、気づいたら、口から出ていた。

「でも……」

「うるさい！ うちやうちや言うてんと、かかつて来いつちゅうねん！」

言いながら、須野木に殴りかかる。

やつぱり、須野木はその場できゅつと目を閉じた。

こいつ、さつきの俺の話、なんも聞いてへんやん……。

俺はパンチを寸止めする。そして、²だらんと腕をおろす。

「おまえなあ」

なんか、もう、怒る気力もなくなつてきた。

「そんなやつたら、やられつばなしやで。ええんか？」

あきれた声で言うと、須野木はぼそぼそと答える。

「うん。まあ、耐えられへんようになつたら、逃げるし」

「逃げる、つて……。やり返さへんつもりなんか？ 絶対に？」

「たぶん」

こいつ、どうしようもない根性なしやな。

「もうええわ！ 勝手にいじめられとけ、ボケ！」

特訓して、鍛えなろうと思つたけど、無駄やつた。

俺が怒鳴つても、須野木は言い返したりしない。

あさつての方向を見て、ぼんやりしている。

謝ろうと思つてたはずなのに、なにを言うてるんや、俺は。

つぎの瞬間、須野木は「しっ！」と言うと、人差し指を口に当てた。それから、耳を^①澄ますようなそぶりを見せる。

なんや？ なんか、聞こえたか？

俺が黙ると、須野木は顔を上に向けて、空を指さした。

「ノスリ」

青い空に、黒っぽい鳥の影が見えた。

「あれ、カラスちゃうんか？」

「ちがうよ。鳴き声、聞こえたし。ピーーエーつて、鳴いてたやろ。これがピーヨロロローやつたらトンとやけど、ピーーエーやからノスリや」

鳥の鳴き[#]真似^はをしながら、須野木はそう言い切る。

よく見てみると、たしかにカラスとはちがつて、茶色っぽい鳥だつた。タカみたいにも見えるが、少し小さい。翼を広げ、空をゆつたりと横切り、どこかに飛んでいく。

³しばらく空を見あげていたあと、須野木はザリガニ釣りをしていたところに戻つた。

なんやねん、こいつ。

ほんま、マイペースなやつや。

ザリガニ釣りをするのかと思いきや、須野木はしゃがんで、バケツを手を取つた。そして、水面に向かって、バケツをひっくり返して、ざあつと中身を流す。ザリガニたちが後ろ向きに^②跳ね、水の中に散らばる。

空っぽになつたバケツをその場に置いて、須野木は歩き出した。

「バケツ、持つて帰らへんのか？」

「うん。もともと、ここにあつたから」

須野木と並んで、俺も歩く。

「どこ行くつもりや？」

⁴「もう帰る」

俺が言いたかつたこと、ちゃんと伝わつたんやろか。

須野木を見ている感じでは、いまいち、わかつてないような気がした。

ほんまに強くなれなくても、強い気持ちさえあれば、負けへんようになるんや。

そのことを、須野木にもわかって欲しかった。

「なあ、須野木。おまえ、明日も、ちゃんと学校、来るよな？」

いちおう、訊いてみると、須野木はきよとんとした顔で、こっちを見た。

「うん。行くつもりやけど、なんで、そんなこと訊くん？」

なんで、って……。

もし、俺があんなことされたら、学校に行きたくないって思うに決まってるからだ。

でも、須野木はちがうんやろか。

こいつ、気にしてないふりをしてるんやなくて、ほんまに、なんも、気にしてないのかもしれない。

「須野木って、毎日、ザリガニ釣りしてんの？」

歩きながら、俺は訊ねる。

「うん、まあ、だいたい」

「おもしろいん？」

「うん」

「なにが、そんなにおもしろいわけ？」

「なんやろ……。わからへんけど、好きやから、ザリガニ釣り」

歩いていると、また鳥の鳴き声が聞こえた。

今度は、空からじゃなく、近くから響く。

「あっ、あれ」

俺は須野木よりも先に、その鳥を見つけた。

草のあいだに、うずくまるようにして、一羽の小さな鳥が鳴いていたのだ。ほわほわした短い毛に覆われていて、まだヒナみたいだ。

「怪我でもしてんのかな」

そつちに近づこうとしたら、須野木が素早く、俺の腕を掴んだ。

「あかんってー」

びっくりするほど逆力のある声で、須野木は言った。

「なんで？ ヒナみたいやし、助けたらうや」

「あかんって言うたら、あかんねん！ 人間が近づいたら、親鳥が帰って来られへんようになるやろー」

俺の腕を掴んだまま、須野木は早口で話す。

こいつ、結構、力あるやん……。

「あのヒナは、果立ちのために飛ぶ練習中で、たぶん、近くに親鳥もいるはずやから、そつとしといたほうがええねん。俺、前に、一回、それで失敗してるから。なんも知らなかったときに、ヒヨドリのヒナを見つけて、助けたらなあかんと思って、拾って、持って帰ってん。でも、結局、育てられへんくつて」

須野木はそう話しながら、とても悔しそうな表情を浮かべていた。

ランドセルを蹴られても、べらべらしてたくせに……。

「そんなときに、本とかで調べたら、ヒナを拾うのは誘拐みたいなもんやつて書いてあつた。だから、こついうときは放っておくのが一番ええねん。かわいそうやからつて、助けようとしても、それつて結局は、人間のエゴやから」

須野木はきつぱり言うと、射るような強い視線で、俺のほうを見た。

こんな目も、できるんやんか……。

ようやく、俺は気づいた。

須野木と俺は、ちがう人間なんや。

こいつの大事なのは、俺とは全然ちやうところにある。

「ごめん」

「なんでか知らんけど、自然とそう言っていた。」

「わかつてくれたんやつたら、ええねん」

須野木は照れくさそうに笑うと、俺の腕から手を離した。

じんじんと痛む腕をさすりながら、俺はまた須野木と並んで、河川敷を歩いた。

問一 線①⑤の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 線 a・b の語句の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---------|---|---|---------------|
| a | 強張らせて | { | ア | 小刻みにふるわせて |
| | | | イ | ゆっくりとそらせて |
| | | | ウ | 思い切りかがめて |
| | | | エ | かたくつつばらせて |
| | | | オ | 大きくかたむけて |
| b | きよとんとした | { | ア | 目を見開いてぼんやりした |
| | | | イ | 口をかたく閉じて決意した |
| | | | ウ | 目を細めて満足そうな |
| | | | エ | 口を大きく開けてあきれた |
| | | | オ | 目をそらして自信なさそうな |

問三 線 1 「いいから、ほんまに」とありますが、須野木の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 一人でザリガニ釣りを楽しんでいたところに、しつこくいじめに来た俺のことを無視しようと考えている。
- イ 暴力でやり返すぐらいなら逃げようと考えており、護身術は必要ないので放っておいてほしいと思っている。
- ウ 他の子と一緒に嫌がらせをしてきた俺が、急に自分の味方のような振る舞いをするので警戒している。
- エ 自分の力で何とかしたいとは思いつつ、暴力で解決するのは良くないので大人に相談しようと考えている。
- オ 本当は自分の腕力に自信があり、俺に護身術を教わらなくても耐えられなくなったらやり返せると思っている。

問四 線 2 「だらんと腕をおろす」とありますが、なぜですか。三十字以内で説明しなさい。

問五 線 3 「なんやねん、こいつ」とありますが、なぜそう思ったのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 最後までいじめられていることをどうにかしようとせず、自分の親切心を無駄にした須野木のことを許せなかったから。
- イ いじめられてとてもつらそうだった須野木が、ノスリを見つけた遠端に元氣になったことが理解できなかったから。
- ウ ノスリの鳴き声をきかけに、自分にとって都合の悪い話題をすり替えてしまった須野木の巧妙さに感心したから。
- エ いじめについては無関心だったのに、鳥についての深い知識をいきいきと話してくる須野木の態度に圧倒されたから。
- オ ノスリの鳴き声に注目したかと思うとあっさりザリガニ釣りに戻るなど、マイペースに振る舞う須野木にあきれたから。

問六 線 4 「俺が言いたかったこと」とありますが、何ですか。その内容を表す一文を本文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問七 線 5 「わかってくれたんやったら、ええねん」とありますが、俺がわかった内容を二つ、それぞれ三十五字以内で説明しなさい。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(出題の都合により、一部表記を変えた部分があります。)

(ある所に弟がいて、その兄と同じく学問を修めるが、名声と人望が兄に及ばないのを) (よくすれば) (親戚)

一 弟ありて、其兄と同じく学問をなして、名望の兄にしかざるを恥ぢて、ややもすれば人に対して兄の短を云ふ。或人これを教

(あなたと兄とは、同じように博學で選賢立の才能もあり) (弟が持っている兄はなし)

へていふ、「足下と令兄と、博學ひとしく詩文ひとしく、手かきすることまで、何一つも令兄に劣りたる事なくて、名望令兄にし

(徳の高い兄が足りないからさ) (修めなければ、すぐに兄さ)

かざるは、徳行のおよばざる故なり。若し足下、令兄にかたんとおぼさば、今より心を改めて徳行を脩めなば、やがて令兄よりも

(追い越すにちがいない) (弟はとてふ喜んで、早成なる言動を懐き、一年が経つころには、優秀つけ難い兄弟になつたので、弟の敬禮さ)

上に立ちなんこと必せり」といひて、弟大いに悦び、日夜言行を慎み、二年許も経て、二難の誉あるに至りしかば、弟のけうま

(兄を非難することがなくなつたばかりではなく) (世の人々を驚かせたことがあつた)

んいつのまにかやみて、兄をそしる事なきのみならず、兄を敬ひつかへて、人の耳目を驚かせし事あり。

(出典 『筆のすさび』 による)

問一 線 a「恥ぢて」、b「教へて」、c「けうまん」を現代仮名づかいによる表記に書き改めなさい。

問二 線 1「手かきする」・3「やみて」の文中における意味として、最も適當なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---------|--|-------|--|
| 1 手かきする | <div>ア 世話をする</div> <div>イ 料理をする</div> <div>ウ 字を書く</div> <div>エ 手抜きをする</div> <div>オ 楽器を弾く</div> | 3 やみて | <div>ア なくなつて</div> <div>イ ひどくなつて</div> <div>ウ 病氣になつて</div> <div>エ こたわつて</div> <div>オ やわらいで</div> |
|---------|--|-------|--|

問三 線 2「令兄にかたんとおぼさば」の口語訳として最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 兄上に頼ろうと思ひになるのであれば
- イ 兄上にどうしても謝りたいと思つたならば
- ウ 兄上にはめられたいと思ひになるならば
- エ 兄上に勝りたいと思ひになるならば
- オ 兄上に勝つても仕方がないと思うならば

問四 弟が兄より名声と人望が及ばないのはなぜですか。その理由が記されている部分を本文中から十一字で抜き出し、最初の五字を答えなさい。(句読点記号等も一字に数える。)

問五 ある人が弟に説いた結果、弟はどうなりましたか。その内容として最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 兄を非難することも時にはあるなど、態度はあまり変わることはなかった。
- イ 兄を非難しないようにはなつたが、それほど尊敬することはなかった。
- ウ 兄に追いつこうと願うことで、人望を得て世間の人々を驚かせた。
- エ 兄と優秀つけがたくなる程の人望も得たが、遂に兄を敬うことはなかった。
- オ 兄を非難することもなく、敬うようになって世間の人々を驚かせた。

[illegible]

問一	①		②		③		④		⑤	
問二	a		b		問三					
問四										
問五			問六							
問七										

三	問一	a	b	c
----------	----	---	---	---

問二	1	3	問三	
----	---	---	----	--

問四		問五	
----	--	----	--

↓ここにシールを貼ってください↓

